

19世紀後半、バレエ王国ロシアは 何故成立し得たか

—ノヴェールの理論の影響の考察—

村山久美子

ロシアでは19世紀後半、バレエ芸術が大きく花開き、「白鳥の湖」「眠れる森の美女」などの、今日古典バレエの代表作と考えられている作品が続々と生まれた。しかし、19世紀初頭まで、ロシアはバレエの後進国であり、イタリアで生まれフランスで育ったバレエを、本格的には、18世紀から移植し、ロシアの文化に溶け込ませていったのである。ロシア・バレエのスタイルの基礎が固められ、外国のスターではなくロシアのスターが活躍するようになるのは、19世紀初頭で、シャルル・デイドロがロシアのバレエの指導者となり、ダンサーの育成と創作に腕をふるった時からである。

この18世紀のバレエ移植の状況と19世紀初頭のデイドロの仕事は、19世紀後半のロシア・バレエの繁栄の一つの鍵になっている。つまり、この時代に顕著である、ノヴェールに代表されるバレエ改革者たちの理念の影響が、繁栄の要因の一つと考えられるのである。

バレエの移植が本格的になってきた18世紀後半、ロシアのバレエを育てたのは、ノヴェールと同様のバレエ改革の理念をもちながら、主導権争いなどで敵対し合い、ウィーンに改革の一派を作っていたフィルファーディングや、その弟子アンジョリーニ、カンツィアーニ、ノヴェールの弟子ル・ピック、カンツィアーニの弟子のロシア人ワリベルク、そして、ノヴェールとその同志ドベルヴァールの弟子デイドロ等であった、つまり、土台作りを行った重要な時期に、ロシア・バレエは、ノヴェールやウィーン派の改革者たちの影響に浸っていたのである。

彼らが強調したのは、まず第一に、バレエとはバレエ・ダクシオン——演劇的な舞踊であるべきということである。つまり、バレエは技術を見せることを目的とするべきではなく、身ぶりや表情の真に迫った表現を通して、感情や情動を観客に伝えるべきということである。ここから導き出されたのが、自然に忠実な模倣であり、優れた文学が格好のバレエの題材となるという考え方であり、観客が感情を共有できるような人物を舞台にのせることであり、ダンサーは脚だけでなく、腕や頭の位置など、体全体でポーズのニュアンスを表現すべきであるという考え方等々である。

18世紀後半から19世紀初頭ロシアで働いたバレエマスターたちは、皆このような理念をもって、バレエをドラマティックなものに、人間のあたた

かみを感じさせるものにしていったのである。しかも、スマローコフやF. ヴォルコフといった非常に優れた戯曲作家や俳優をその土台作りに参加させ、演劇的要素を強めたのであった。

19世紀前半にロシア・バレエの基礎作りを完成させたデイドロで、ノヴェールの直接の影響を受けた人々の時代は終わるが、その後もロシアでは、「エスメラルダ」のような劇的作品を演出したペロー、そして、ペローの演出に心酔していたプティパへ、そして、20世紀のバレエマスターたちへと、ドラマティックなバレエを重視する伝統が続いてゆく。

19世紀前半まで世界のバレエ界の中心であったパリでは、権力争いでノヴェールを短期間で芸術監督から引き下ろし、それ以後あまり重要視されず、19世紀後半には、次第に技術偏重に陥ってバレエが衰退するのに対し、ロシアでは、19世紀にバレエが飛躍的發展を遂げて、後半にはバレエ王国を築き上げる。この衰退にはもちろん、プティパ自身の才能やチャイコフスキーの音楽、社会状況等々、様々な要因が働いているが、ノヴェールの理論がロシアで歓迎され、観客の心に訴えるドラマティックなバレエを作る伝統が築かれていたことも、その重要な要因の一つであると考えるべきであろう。